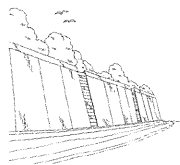


海外ドボク体験——途上国にみるドボクの原点



「アフリカの水を飲んだものはアフリカに帰る」という言い伝えがある。私は30年前にサハラ砂漠を自転車で縦断したので、現地の水を飲みすぎたのか、もう70回近くアフリカに通っている。青い空と白い雲、赤い大地と緑の森、屈託のない笑顔、貧しくてもお互いが協力して前向きに生きようとする人々、それらをまた見たくて、訪れ続けている。空港に降り立つと、独特のアフリカの匂いと風を感じることができる。

アフリカの途上国に行くと、驚く程ドボクが必要とされ、ドボクを操れる人は尊敬される。なぜなら、電気も水道もガスもない生活をしている人々が多く、豊かに安全に暮らすための基本的な構造物が不足しているからである。自然災害で被害を受ける場合も多い。訪ねた村で、ここは江戸時代かと感じたことが何度もある。私は住民とともに、雨季にぬかるんで車が通れなくなる道を、雨水を防ぐ土のう袋を地面にならべ修復する人工工事を、もう10年近く続けている。簡単な技術であるが住民が理解しやすいので、ドボク技術者として大変感謝される。日

本では考えられないが、ぬかるんだ道では車が走れないので、市場や病院や学校に行けず、生活に大きく支障をきたすのだ。彼らの対処法は車から降りて押すことであつた。

ドボクの原点は「人々の暮らしを守り豊かにすること」である。そして、ドボク技術者たるもの、現場に実際出かけて行き、物事を観察し、自然条件や気象条件また地盤条件を見据えて構造物をつくる。私の経験から、途上国で活動するために何が必要かという点、何でも食べられ、だれとでも話せ、どこでも寝られることだと思ふ。自然や人の懐に入り、相手の文化や習慣を理解して相撲を取らねばならない。

不合理なルール、インチキな輩の存在や治安の悪さで、何度か苦々しい思いをするだろう。お人好しの日本人は、口約束で仕事をしてしまいが、外国では通用しない。きちんとお互いが納得し文章として残す必要がある。「そんなことは言っていない」と、問題が起こってから平気で言われる。手が滑って自分で落としたコップに対して、コップが勝手に落ちたと平気で言う人もいる。開いた口が塞がらない。いちいち頭にきていると身が持たないので、ドボクに携わる人は心に余裕を持って臨み、3歩進んで2歩下がるくらいの心持ちがちょうどいい。

ケニアのマサイ族に、こう言われたことがある。

「君は遠い国の大学の教授で偉いかもしれないが、ライオンは何匹殺したのか。私は3匹だ」
机の前にしがみつかず、世界が現場のドボクの世界で楽しもう。



木村亮(きむらまこと) 京都大学社会基盤工学専攻教授。1960年京都府生まれ。1982年京都大学工学部土木工学科卒業、1985年同大学院工学研究科土木工学専攻修了。1985年京都大学工学部助手、1994年同助教授、2006年同教授。毎年1/3は海外出張、2/5は国内出張。趣味は世界の道直し、日本映画鑑賞、山登り、土木遺産巡り。得意科目/物理、地理。苦手科目/英語。バイト経験/家庭教師、塾講師、中華・日本料理店、昆布屋、結婚式場、建設工務店など多数。